

# 導入半年、成果手応え

## 県内初の高次脳機能障害訓練

障害者支援施設・ゆすの里(日置市)は2015年度、交通事故などをきっかけに発症する「高次脳機能障害」に特化した生活訓練を、県内で初めて導入した。6月の本格運用から半年がたち、利用者によって一定の改善がみられるなど成果も見えている。

### 入所型施設・ゆすの里(日置市)

鹿児島市の江口秋彦さん(52)は昨年11月、交通事故で一時意識不明に陥った。命は助かったが、高次脳機能障害の症状の一つ、左側にあるものが認識できなくなる「左半側空間無視」に悩まされるようになった。

方向感覚がつかめず、まっすぐに進めない。洋服の



①各種リハビリテーション  
②メモリーノート作成  
③買い物、交通機関利用といった日常生活訓練などで構成されており、集団訓練が



高次脳機能障害に特化した生活訓練を受ける当事者ら一日置市の障害者支援施設・ゆすの里

## 症状認識し「対応力」養う

基本だ。障害者福祉サービスとして、原則2年以内の利用が可能となっている。

なぜ、高次脳機能障害に特化したプログラムが必要なのか。

ゆすの里支援課の小園大祐(主査)理学療法士は「脳の損傷による機能障害で社会性を失っている当事者は、

(身体・知的障害と違い)身体機能の回復だけでは社会復帰できない」と説明する。いわば「脳のリハビリ」が必要というわけだ。

高次脳機能障害は、脳の損傷部位によって発語、記憶、認知、感情などに障害が出る。個性が高い上、当事者も「できないこと」に気付きにくいという特性があるため、「症状を認識してもらう、それに対応す

る力を養っていくこと」が訓練の主眼になっている。

例えば、左半側空間無視の場合、右から左に文章を読んだり、間違い探しで空間全体に注意を向けることで「どうすれば左側の認識力を補えるか」を学ぶ。集団訓練を基本に置くのも、ほかの当事者の行動から気付きを促すモデリング効果

を狙っているからだ。訓練開始から半年、江口さんは「成果を実感している」という。「園内で迷子にならなくなったし、服も一人で着られる。最近では介助なしでトイレに行けるようになった」。できないこともまだまだ多いが、自立への自信は日々深まっている。

他の障害と違った特性を持つ高次脳機能障害だが、

国内で支援が本格化したのはつい最近だ。発症原因の9割を外傷性脳損傷、脳血管疾患が占めており、2000年代に入ると、事故・病気の後遺症という認識が一般的だった。このため、当事者・家族は生きづらさを抱えたまま社会に取り残されてきた。家族らでつくる高次脳機能

障害「ぶらむ」鹿児島市の湯之前八束相談役は「急性期を脱した後の『行き場』に困っていた私たちにとつて、専門プログラムが受けられるようになった意義は大きい」と話す。

県内の当事者数は不明だが、県高次脳機能障害者支援センターに寄せられる新規相談はここ数年、年間100件前後で推移している。当事者や家族が障害に気付かずにいるケースも多いため、潜在ニーズは相当数ありそうだ。

こうした状況を受け、ゆすの里を運営する県社会福祉事業団は8月、高次脳機能障害に特化したリハビリ施設「リハステーションゆす」を鹿児島市内に開設することを決定。ゆすの里での成果を踏まえたプログラム開発などを進め、16年4月の開業を目指している。(三宅太郎)